

第十七回 中国研修旅行報告

川崎 道利

恒例の中国研修旅行、今年で十七回目である。よくぞ十七回も廻ったものである。さすがに中国は広い。然し、行きたい所はまだまた沢山ある。

さて、我が国にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルは一五〇六年スペイン・ナバラ・ザビエル城に生れ、一五四九年、鹿児島、大分、平戸、そして京都、山口と布教し、一五五一年日本を離れてゴアに戻ったが、ゴアで再び中国への布教を考え、広東省の南方にある上川島に上陸した。しかし不幸にして翌五十二年十二月、病を得て同島で死去された。

今年はそのザビエル生誕五〇〇年記念の年である。そこで今回の研修地はザビエル終焉の地上川島を中心に広東省を巡る事にした。昨年の研修地・福建省のすぐ隣である。

十月二十四日朝、福岡空港より広州直行の予定が便の都合で台北経由で行ったので予定より一時間程おそくなった。夕刻香港空港着、早速高台の展望所へ行き、すばらしい香港夜景をながめた。長崎もかつては「東洋のナポリ」と云って誇った時代もあったが、どうして〜、ネオンに輝く高層ビルの林立する香港の夜景は正しく百万ドルであった。しばし見とれる。山を下り、レストランで四川風料理をいただき、ホテルで第一夜をすごした。



マカオ・聖ポール天主堂跡にて

翌二十五日、香港市内の遺跡見学、先ず文武廟に行く。其処は一八四〇年代の建設で香港で一番古い廟と云われ、文をつかさどる文昌帝と武の関帝を祀る美しいお堂が幾棟もあった。堂内で先ず驚いたのは、径一米あろうと思われる渦巻状の線香が天井から何本も吊り下がっていたのである。一本燃えつきるのに一週間はかかるそうである。廟の前の通りの名が「ハリウッド通り」と言うのには驚いた。荷李活道(古董街)と中国語で書かれていた。

次いで黄大仙廟に行く。ここは、又、カラルの華やかな廟であった。黄、赤、緑、金色

が、敷地の中心に九層の舍利塔、花塔と云う佛像が多数祀られ以前は千仏塔と呼ばれていたとの事。

塔は高さ五十七米。この塔の頂上まで挑戦する者数名、狭く高い段は二〇〇、でも頂上からの素晴らしい見晴らしに疲れも消える思いだった。

夕刻バスで台山へ。途中中小高い丘の上にさき程の花塔をつくりの塔が目にかかり、「あんな山の上に資材の運搬は…」などと余計な心配をする。

更にバスにゆられて二時間余、台山とは聞いた事もない町、かなりの都会ではあるが、上川島に渡るための湊町であると言う。港のガイドの女性の胸の名札に川島とあったから彼女の名かと思つたら、上川島と隣の下川島を川島と云うらしい。

台山に一泊、いよ〜上川島へ。

先ずバスで山咀埠頭へ行く、そこから高速船で約三〇分で島の三洲埠頭へ上陸。思ったより大きな島であった。

バスでいよ〜ザビエル教会へ。「方濟各・沙勿略」これで「フランシスコ・ザビエル」と読む。墓の上に建てられた小さな教会で目下外装修復工事中であった。中ではミサがあつていたが快く私達を中に迎えて下さった。教会では前の席に座らせて戴き、聖書と賛美歌を合唱、教会内にある墓石の前で神父さんと共に写真にうつり、今回の研修旅行第一の目的を有意義に明るく終える事が出来た。

次いで樂川大佛に行く。これは観光用であろうか、岩の上にとつかと坐つた大佛さま。後の洞窟内には十八羅漢や佛像など、女性の佛さまはあり皆美人であった。

丘を下りると美しく広大な砂浜飛沙灘、東洋のハワイとも云われる砂浜があり、スクーターを走らせたり、靴を脱いで足を水に浸したり楽しく遊んだ。然し目下はシーズンオフであり、海岸のホテル街には人の姿が見当らなかつた。

翌日、最後の目的地マカオへ、高速船とバスで有名な聖ポール天主堂跡に行く、正面外壁のみ残すこの教会。一八三五年の火災のあと修復された壁面の美しい彫刻の数かず、博物館と地下聖堂、古いお墓など見るべき物が多かつた。

ここ前の通りには古い洋館や教会など、人通りが多い。次にはミカエル墓地を経て媽祖閣廟に行く。ここはマカオ最古の寺院として崇敬され、媽祖や観音、その他種々の神が祀つてあり、大きな石に彫られたジャンクなど珍しい物が多かつた。

いよ〜行程も最後に近づく。海岸近い所にある聖フランシスコ・ザビエル教会、ここは聖人の遺品を祀るため一九二八年建立されたクリーム色の明るい建物、中央の広場をはさんで両側の小さなレストランの屋根を貫く大きな榕樹が何本もあつて面白い。

マカオの波止場より船に乗り新しい香港の空港に行く。その飛行場の広いことに驚いてしまった。長崎に着いたのは夜の十二時近かつた。

(長崎歴史文化協理事)

等の美しい建物が広い敷地に幾棟も建っており、中国では有名な道教寺院で、「砂

を萬病に効く薬に変える術」を仙人から伝授されたという黄大仙がこの本尊として祀られていた。この境内の一隅に数十軒が並ぶ占師の店があつた。日本語も英語もOK、廟の後には広大な美しい庭園があり、其処には岩山もあり池もあり、私は道を迷いながら集合時間におくってしまった。町には二階建のバスと電車が賑やかに走っていた。

夕刻、列車で広州へ行く、ここは広東省の首都である。翌朝は先ず西漢南越王博物館へ行く。

ここは一九八三年に偶然発見された前漢時代の南越国第二代の王趙昧の墓で、秦国崩壊後、秦の將軍趙陀が南越国を建て初代の王となり、ここ広州を都とした。今回発見された二二〇〇年以前の墓の中には一〇〇〇点以上の埋葬品があり、墓の後には博物館があり、其処にはその品々が展示してあつた。

王の墓は宏大な石室を中心にしたものであつた。現在其れを保存する為につくられたに建てられた建物も素晴らしかつた。博物館の展示品の中では青銅器や陶器、玉石器など多くの品々の中、特に糸縷玉衣が一番目についた。これは一一九一枚の玉片と赤いシルクの糸で織られた衣装で、二〇〇〇年前に埋葬された王の全身が、これで覆われていたとの事である。

次いで広州博物館へ行った。この建物は明代の一三八〇年、広州城の楼として建てられたもので、五層楼で赤茶色に彩色された大型の建築で、ここから望む広東湾の大海原を鎮める願いを込めて之の楼を鎮海楼と名付けられていた。

展示品も広東省の成立時代から近代までの歴史的遺品が展示してあり、また広場にはアヘン戦争時代の、旧式な中国砲や当時中国がヨーロッパに注文した洋式砲など多数展示してあつた。

ここから街を見下すと、はるか彼方に孫中山記念碑の塔が望めた。

次に訪れたのが六榕寺である。ここは五三七年に創建というから一四〇〇年以上の歴史を有する古寺で、もとは淨慧寺といつたが、詩人として有名な蘇東坡がここを訪れたとき、境内に六本の大きな榕樹が生えているので六榕と詠んだ漢詩がある事から六榕寺となつたという。又、境内には佛像や舍利塔が多く見られた

風信

○あと十枚、暦をめくると平成十九年一月一日となる。

○一八〇〇年ころ編纂された「長崎名勝図」を読むと、西山の禪寺・祇樹林内に「芭蕉翁の歳旦塚あり」と記してある。故丹羽漢吉先生注の長崎名勝図絵には、今は祇樹林・龐寺となるも寺跡の石壁に歳旦の句碑のこれり、その句にいう「長崎の歳旦もらふ歳暮哉」。歳旦とは一月一日のことであり、又は其の日を祝う句を言うことであつた。但し先学は私に「この句は芭蕉にはないよ」と言われた事がある。

○年末をむかえると事務局は来年一月に発刊する「ながさきの空」特集十八号編纂で忙しくなつた。事務局では先ず本年一月より十二月まで毎月発刊した「ながさきの空」を整理し、次に特集編とし今回は江戸時代の長崎料理を白芦華が記した「料理集」を掲載する事にして、本会古文書会の宮田修二・川原清の両氏を中心に整理して戴いた。

○二十六聖人記念館の結城了悟神父より長崎開港時のイエズス会の活躍を一九五五年当時のアポロジャ、イエズス会通信等を引かれて研究をまとめられた「長崎開港と其の発展の道」をいただいた。長崎史研究者にとつては多くの新資料が紹介されており是非一読しておかねばならぬ資料の一つであると考えた。(同書は書店で販売されていないので、希望者は本会事務局まで御連絡下さい)(一、二〇〇円)

○歌人宮田カイ子女士より歌集「榮惑」を戴いた。同書に序文を寄せられている有馬朗人先生(前文部大臣)は「女史の短歌は先ず其の歯ぎれの良さに注目する」と記しておられる。

○十二月三十一日夜は本会と長崎史談会の恒例行事となつた三十一日夜の「除夜の鐘」より諏訪・伊勢・松森の新年三社初まいに参加される方は同夜十一時半までに伊良林光源寺本堂にお集まり下さい。川崎道利先生が御案内されます。

○平成十九年一月は、五日(金)午前十時より事務所を開きます。

